

## はじめに

名古屋大学（以下、本学ともいう）では、毎年六月初旬に名大祭が開催されています。今年二〇〇二（平成一四）年度も、第四三回名大祭が東山キャンパスで六月五日から九日までの五日間にわたって開催されました。現在、国内には約六八〇校の国公私立大学（四年制）があります。それらのすべてを正確に調べたわけではありませんが、大半の大学が秋季（九月〜一月）に大学祭を開催しています。その点からみると、大学祭を初夏に開催する名古屋大学のよいうな事例は珍しいといえます。ただし、本学での大学祭が、最初から初夏に開催されていたわけでもありません。

そもそも本学において「大学祭」という名称が使われるようになったのは一九五七年以降のことです。それ以前は「開学記念祭」という名称で、講演・合唱・演劇・展示などの文化諸行事や体育行事が行なわれていました。しかも、当初、開学記念祭は一月初旬に開催されていましたが、一九五二年以降から五月下旬あるいは六月初旬に繰り上げて開催されるようになったのです。そして、今日のように「名大祭」という名称で開催されるようになったのは、一九

六〇年六月開催のとき以降のことでした。

なお、本学では、この開学記念祭とは別に学内の諸文化団体がそれぞれに開催する「文化祭」がありました。それらについては、一九五四年以降、秋の好シーズンにまとめて文化祭として行なわれるようになっていきます。

本書では、名大祭について取り上げたいと思います。その際、なぜ名大祭が一九六〇年という時期に誕生したのか、その後四〇余年の名大祭のあゆみはどのようなものであったのかなどについて触れてみたいと思います。過去の名大祭との比較を通じて、今日における大学祭の意味を歴史的に考察する際の手がかりを提示するのが本書のねらいとなっています。

## 一、愉快な名大祭

### ◆第四三回名大祭―「飛翔」

二〇〇二（平成一四）年六月五日から九日にかけての五日間、名古屋大学東山キャンパスに